

アジア
に
希望
を
燃
す

1958年MRA世界大会報告集



ワシントン国会議事堂前の一行

アメリカ・ミシガン州マキノ島の大会々場 (MRA施設)



ワシントン記念塔前における野外大集会



「生涯最高の新機」の舞台面



マキノ島でのある日の一行



世界大会について

一九三八年、ロンドンの労働者街でM R Aと名のり、一つの世界勢力として結集されてから、今年で二十周年である。

中東の動乱、北アフリカ問題、インドネシアや他のアジア諸国の危機、ヨーロッパの不安定、頂上会議の成否等が世界の新聞で論ぜられている折柄「融合をもたらすイデオロギーこそが根本的な前提条件である」とのテーマの下に、今年アメリカ、ミシガン州、マキノ島に於て五月二十九日から八月三十日まで、スイスのコーと相呼応してM R A世界大会が開かれた。

四十九ヶ国の代表がこの会議に参加し、日本からは、労働界、実業界の代表と共に五十名の青年代表が参加した。

大会場のマキノ島は古くからアメリカの歴史に出て来るミシガン湖とヒューロン湖の相接する所にある周囲九マイルの島で、全島は美しい樹木と芝で舞われ、古風な城塞が青空にそびえ、唯一の交通機関である古色豊かな馬車と共にこの国際会議に格別の情緒を添えてくれる。

建物は中央に大きな劇場、その右手に大集会場、食堂が並び周囲に住

宅ビルが点在している。これ等の建物は決して派手でないけれども、アメリカ一流のホテルに劣らぬ程完備され、大会の成果をいやが上にも挙げるためにかくも行き届いた配慮がなされた事に数服するばかりである。

この恵まれた環境の中にあつて、いろいろな人種の人々が、いろいろな服装をして、いろいろな言葉で、切実する様はまさに世界大会の名に相応しい光景である。

会議は午前七時半—九時、十一時—一時、五時—七時と一日の中に三回行われ、毎晩八時から劇場に於て必ず劇か映画をたのしむ事が出来る。

食事の風景も亦この大会の重要な一つである。ブックマンの食堂と呼ばれる素晴らしい部屋に続いて大食堂が湖に沿つて並び、一〇〇を超えるテーブルには人種・服装・経済・言語、正に百花りようらの花が咲くカフェテリアもまた重要な食堂である。

会議の模様について説明しよう。

大集会室の前中央に備かに高いヒナ壇があり、左手にピアノやその他の楽器が置かれているだけで、それは全く自由な余りにも自由な会場である。

会議を運営するのに議長がないと言つたら、キッド知らない人は驚くかも知れない。それのみか、人々は許可を得て発言するのではなく、自由に壇上に立つてスピーチをする。そして混乱することなく、斯くも世界的大問題が短時間の中に解答を見出すと言つたら、それこそ想像を絶するだろう。然し、これは事実なのである。これがM R A

の世界大会であり、MRAの姿であり、秘密なのである。スピーチの間には音楽が飛び出して来る。然しそれは必ずしもレクレーションではないのだ、寸劇が行われる事もある。之も楽しみの為ではない。

MRAは組織ではなくて有機体であるという事を理解すると始めてこの事を理解する事が出来よう。有機体を活動させているものは何か、それは生命であり、ガイダンスなのである。ここでは、人間が四つの道徳標準、絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛に照して自らの良心の声——神の声を一冊のノートに書き留めるこの神の意志——決して特定の宗教によらない——即ちガイダンスに従って人々は確信を以て行動するのである。

僅かに一時間前に準備会が持たれる。人々は問題を提示するのでなく解答を与えるのである。あの普通の会議によく見られる混乱はここでは見る事が出来ない。その代り融合と確信とを発見する事は出事よう。

ここに一、二の例を挙げよう、日本に關係のある事について。先ず日本の為に用意された音楽が鳴る。その日の司会者が出て紹介する。

沖繩の代表尚夫妻が壇上に出る。

「今こそ本当に世界に於て何が必要であるかを発見出来た」と感謝する。

アメリカの青年医師ドクター・クロース夫妻が出て、「実は自分は沖繩に従軍した。沖繩の祖先伝来の農地は米軍のゴルフ場と化し、然も高民はその遊技の労役にしか従事出来ないのだ。アメリカは間違つて

いる。相すまない」と謝罪する。突然頑強な中年の紳士が壇上に飛び出て、「実は自分こそ沖繩にいた米軍の将校の一人である。誠に相済まなかった」と心から謝罪する。なみいるアメリカは勿論、各国の政治家や、ジャーナリストやその他凡ての人々が非常な感動に動かされて行く。そして人々は何も言わないけれども、今やこの世界を真に教うるものが何であるかを発見する。「それは誰が正しいかでなくて何が正しいか」だ。

今一つ挙げよう。韓国の代表団が帰る日である。「自分は長い間、日本に対する憎しみを抱き続けた。然しそれが本当に何をもたらしたろうか。自分の家庭に於ても同様だった。世界の混乱の原因の一つになつている自分に気がついた」と切々と体験を語って「ここにいる多くの日本の青年諸君に感謝する。その崇高な絶対愛に生きようとする心に感謝した。今こそ、日本と韓国が先ず第一に融和しなければならぬ」と手を差し述べた時には我々日本人の心の中に何が起つたか、それはここで取り立てて言葉を必要としないであらう。

今はこのマキノ島大会に参加した主だった國々の代表者の名前を挙げそれがどの様なスケールで行われ、どの様に世界に拡がって行くかを考えていただく。

アフリカ

フレンチカメルーン

マダム・ポリン・ペーメ

ガ ー ナ

愛国婦人会会長

タリ・ヤクブ・ザ・トロンナ氏
スダールン

ドクター・オスマン

ナイゼリヤ

ドクタ・エミ・アデモラ

ジョン・アマタ

ケニヤ

レディー・エリーナー・コール

南アフリカ

ブレマー・ホフマイヤ夫妻

マナッセー・モレーン

日本

沢 沢 夫 妻

三井高 雅 夫 妻

住友吉左エ門氏

浜井信三 夫 妻

柳沢 謙 造 夫 妻

尚 監 夫 妻

橋 本 麗 胤 師

青年代表五〇名青年団健育会等

フィリピン

ビヤセント・ビラミー夫妻

フェルナンダ・バルボア夫人

メイジャー・アゼリコ・パライバイ

北部地方会長

駐米大使

保健省次官大森族

学生委員長

首長の姪

政治指導委員会

アフリカ教職員組合

副会長

前 廣 島 市 長

全日本造船労働組合

委員長

沖 繩 県 長

奈良薬師寺管長

ナボレオン・レチヨコ夫妻

バストル・リムア

マリイ・ナチヴィグッド嬢

マイク・マレイト

インドネシヤ

アリオ・ビーレノ

デ・マリーバラシ

スー・マントリ・マートデイベニエーロ

ゼイ・シラエン

ケマス・エイ・マスディク

ユスワル・マルズキイ

バルス・ミリン

前大学生団体会長

愛国学生同盟会長

大学経理学生会々長

フットボールチーム主将

愛国青年戦線会長

キリスト教労働組合

委員長

ジャヤナリスト

ジャカルタ大学

政治科学委員会

南スマトラ銀行

経営者協会々長

石油会労働組合代表

インドネシヤ

労働保健組合書記長

ピルマ

ドク・キーク

ドウ・ニエイン・タ

ドウ・サン・サン・ヌー

クイー・キン

タイ

ロード・アボット・フラ・ビマラドハルマ

ヴェトナム

トロン・チスアン嬢

スイトル・トラン・ヴァン・キーム

スロング・ディンズ夫妻

大衆教育訓練所長代理

教 育 家

ウー・ヌー首相嬢

情報局長代理

パンコックの寺院

内務 閣

デイーム大統領姪

法 律 家

刑 法 学 者

ホーン・トロング・バ教
グ・クアン・ニン
ホンコン

ホイ・チュー・フン
ハーロルド・チョー

台 灣

ゼネラル・ホー・インチン
ホリントン・トン

韓 國

學生・実業家・新聞人・教育者等十五人

印 度

シブナス・パネルシール夫妻
ビー・ビー・バトナーガー
エイ・ケイ・ゼイン
イド・リス・デルウイ
ゴピナス・シン
ラジモハン・ガンジー
ヴィーレンドラ・アデーヤ
ケイ・エム・ムンシ博士
ケイ・エム・ムンシ女史
エイ・ラプタコス
パキスタン
ハヤラドディン夫妻

政 党 々 首
海 軍 大 尉

香港九電貿易協會書記
香港 大学 教授

作 戦 顧 門 会 々 長
駐 米 大 使

西ベンガル社会主義者
労働組合長
週刊誌「サフタイク」編集長
ビンダスタン「編集長」
ナブ・パロットタイム
編 集 長
ジャーナリスト
ニューデリー議員
ジャーナリスト
ガンジー孫
「ボンベイサマチャー」
通信員
前知事・農薬大臣
印度憲法起草者の一人
社会運動指導者
上院議員
ボンベイ工業家
駐米大使、陸軍武官
技術者、協会会長

オ ラ ン ダ
ド イ ツ

フリッツ・フィリップ夫妻
フリッツ・ギンツル・フォン・ニルゼン
エイチ・イ・ガデ・モハメット・イサ
ポール・クロスキー夫妻
ニュージールランド

ヤン・ダグラス
レイ・ジョン

英 國

ピーター・ハワード
レディ・グラーム
エイ・ブレイヤオリファン
ブライアン・ブライヤー夫妻
ジョナ・ロッド
ダヴィット・ボフマン夫妻
メイジョー・ハロルド・アル・スベンス
エイ・アル・ケイ・マフケンジー
ゼイムス・ハワーズ
アルベルト・テイ・アレ
カール・ブレダ夫妻
フランドス
ブルディナンド・フリーマン
シニブルグ博士

電 氣 工 業 副 社 長

ルール地方農産經營者
回教徒連盟書記長
前駐ブラジル大使
鉱夫、元共産黨員

「ドミニオン」通信員
青年指導者

ジャーナリスト
侯爵夫人
空軍司令官
非常に有名な選手
貴族の娘
果樹野業組合長
保守党員
駐仏大使
交通従業員組合長
炭 鉱 夫
デトロイトの領事

北アメリカ合衆国、カナダ

ブ ラ ジ ル
 ダマシヨ・ジョセ・カマドソ
 ネルソン・マセリノ・ダ・グフパロー
 カーロス・ピント

コ ス タ リ カ
 デ ン マ ー ク
 ス エ ー デ ン
 ゼームス・デイックソン

ス エ ー デ ン
 ベント・ジョンソン僧正
 アイザ・ポールゼン夫妻

ス イ ス
 マクス・スコッチ夫妻
 テオ・スベリ夫妻

イ タ リ ー
 セナトル・マルテオ・ヴデアニ

イ タ リ ー
 イレン・ロール女史

イ タ リ ー
 バイリッパ・シムウエイヌグス
 バイナード・ザマロン
 ビクタリー・ローレル
 イレン・ロール女史

大 学 生 十 名
 港 灣 民 間 勞 働 者 組 合
 副 會 長
 港 灣 公 認 勞 働 者 組 合 會 長
 港 灣 勞 働 者 協 會 々 々 長

議 員、宮 内 大 臣
 大 学 生 十 名

元 共 産 党 員
 議 員、宮 内 大 臣

元 共 産 党 員
 「ノイエ・ツルヘルツァ
 イトナ」新聞の通信員
 テューリッヒ大学教授

キリスト民主党指導者
 「ノイエ・ツルヘルツァ
 イトナ」新聞の通信員
 テューリッヒ大学教授

キリスト民主党指導者
 前フランス婦人社会主義
 の書記長、元議會議員

週 間 誌 「フ ラ ン ス
 の 義 勇 隊」 の 発 行 者
 鉄・石炭問題の最高権威
 海 員 組 合 指 導 者
 前フランス婦人社会主義
 の書記長、元議會議員

ジョン・ユム・ロビンソン
 ファイリッパ・ワイトヘッド夫妻
 ウイリアム・グロウガン夫妻
 アイレン・マッコイ・ゲインズ女史
 ロセ・グラブッグ女史
 ジャーネートルド・リーゼヒックス女史
 リチャード・ヒントン夫妻
 サムエル・ヘイス
 アラン・クエットナー
 テスレイ・カーター夫妻
 ジャーレス・アレキササレグー夫妻
 ヘンライン・バンニス女史
 シ・エヌ・コーネル
 アルバート・ベユシオン夫妻
 アン・パックス嬢
 チャールス・ブラウンサン
 カールトン・エイチ・キューリー夫妻
 チャールス・ビー・ディーン夫妻
 ジョージ・イーストマン夫妻
 リチャード・フラッド夫妻
 サムエル・グラーム夫妻
 マクス・グレイ夫妻
 ジョン・グリーグ夫妻

交通労働者全国副会長
 印刷新聞人協会国際代表
 前全国婦人クラブ協会
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 現 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 元 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 カナダのシエル石油会社
 人 事 部 長
 放 送 局 員
 アトランタの新聞支局長
 カナダの 議 員
 フランクリン市長
 料理大学婦人学部長
 アトランタにある最大
 最古の黒人学校の校長
 有名なニグロ教育家
 女 優
 議 員
 大 学 社 会 学 教 授
 インディアナ学部長
 前 議 員
 南 加 日 米 協 會 會 長
 電 氣 會 社 人 事 部 長
 會 社 々 々 長
 カナダ国際機械
 労働組合書記長
 ミシシッピ工場
 組 合 書 記 長

交通労働者全国副会長
 印刷新聞人協会国際代表
 前全国婦人クラブ協会
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 現 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 元 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 カナダのシエル石油会社
 人 事 部 長
 放 送 局 員
 アトランタの新聞支局長
 カナダの 議 員
 フランクリン市長
 料理大学婦人学部長
 アトランタにある最大
 最古の黒人学校の校長
 有名なニグロ教育家
 女 優
 議 員
 大 学 社 会 学 教 授
 インディアナ学部長
 前 議 員
 南 加 日 米 協 會 會 長
 電 氣 會 社 人 事 部 長
 會 社 々 々 長
 カナダ国際機械
 労働組合書記長
 ミシシッピ工場
 組 合 書 記 長

交通労働者全国副会長
 印刷新聞人協会国際代表
 前全国婦人クラブ協会
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 現 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 元 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 カナダのシエル石油会社
 人 事 部 長
 放 送 局 員
 アトランタの新聞支局長
 カナダの 議 員
 フランクリン市長
 料理大学婦人学部長
 アトランタにある最大
 最古の黒人学校の校長
 有名なニグロ教育家
 女 優
 議 員
 大 学 社 会 学 教 授
 インディアナ学部長
 前 議 員
 南 加 日 米 協 會 會 長
 電 氣 會 社 人 事 部 長
 會 社 々 々 長
 カナダ国際機械
 労働組合書記長
 ミシシッピ工場
 組 合 書 記 長

交通労働者全国副会長
 印刷新聞人協会国際代表
 前全国婦人クラブ協会
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 現 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 元 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 カナダのシエル石油会社
 人 事 部 長
 放 送 局 員
 アトランタの新聞支局長
 カナダの 議 員
 フランクリン市長
 料理大学婦人学部長
 アトランタにある最大
 最古の黒人学校の校長
 有名なニグロ教育家
 女 優
 議 員
 大 学 社 会 学 教 授
 インディアナ学部長
 前 議 員
 南 加 日 米 協 會 會 長
 電 氣 會 社 人 事 部 長
 會 社 々 々 長
 カナダ国際機械
 労働組合書記長
 ミシシッピ工場
 組 合 書 記 長

交通労働者全国副会長
 印刷新聞人協会国際代表
 前全国婦人クラブ協会
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 現 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 元 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 カナダのシエル石油会社
 人 事 部 長
 放 送 局 員
 アトランタの新聞支局長
 カナダの 議 員
 フランクリン市長
 料理大学婦人学部長
 アトランタにある最大
 最古の黒人学校の校長
 有名なニグロ教育家
 女 優
 議 員
 大 学 社 会 学 教 授
 インディアナ学部長
 前 議 員
 南 加 日 米 協 會 會 長
 電 氣 會 社 人 事 部 長
 會 社 々 々 長
 カナダ国際機械
 労働組合書記長
 ミシシッピ工場
 組 合 書 記 長

交通労働者全国副会長
 印刷新聞人協会国際代表
 前全国婦人クラブ協会
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 現 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 元 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 カナダのシエル石油会社
 人 事 部 長
 放 送 局 員
 アトランタの新聞支局長
 カナダの 議 員
 フランクリン市長
 料理大学婦人学部長
 アトランタにある最大
 最古の黒人学校の校長
 有名なニグロ教育家
 女 優
 議 員
 大 学 社 会 学 教 授
 インディアナ学部長
 前 議 員
 南 加 日 米 協 會 會 長
 電 氣 會 社 人 事 部 長
 會 社 々 々 長
 カナダ国際機械
 労働組合書記長
 ミシシッピ工場
 組 合 書 記 長

交通労働者全国副会長
 印刷新聞人協会国際代表
 前全国婦人クラブ協会
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 現 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 元 黒 人 婦 人 ク ラ ブ 協 會
 長
 全 國 婦 人 組 合 會 長
 カナダのシエル石油会社
 人 事 部 長
 放 送 局 員
 アトランタの新聞支局長
 カナダの 議 員
 フランクリン市長
 料理大学婦人学部長
 アトランタにある最大
 最古の黒人学校の校長
 有名なニグロ教育家
 女 優
 議 員
 大 学 社 会 学 教 授
 インディアナ学部長
 前 議 員
 南 加 日 米 協 會 會 長
 電 氣 會 社 人 事 部 長
 會 社 々 々 長
 カナダ国際機械
 労働組合書記長
 ミシシッピ工場
 組 合 書 記 長

マーガレット・ルンド女史

ゼロメ・ネルソン

パークス・シブレイ夫妻

ミユリエル・スミス嬢

デューク・エイチ・ソートン夫人

エイ・テイ・ワルデン大佐

ロバート・ウエツプ

モリス・ウエンラフ夫妻

エドワード・リトル夫妻

エイ・ウオーラー・ブリッヂ

ロバート・アレン夫妻

イ ラ ン

エヌ・エヌ、フエイト博士

今年の代表団の紹介

今年のマキノの大会に参加した日本代表チームは総勢六十九名である。内十一名は、昨年より引つづきマキノに残留していた人と既にアメリカにいて参加した人等で、後の五十八名が日本から出発して参加した代表である。さらにこの内三十名が全国の青年団関係の指導者である。この外に代表団のなかには多様な顔ぶれの人たちが見える。

農産団体婦人部長

国際社交クラブ会長

銀行協会相談役

女 子 優

社 長

大 審 院 弁 護 士

新 聞 編 集 長

ケンタッキー下院議長

商 店 会 計 係

ブロナデューサー

プロデューサー総監督

元副俄 大学教授、政覚首

例えば三井高維氏は三井本家の当主の令弟であり、財団法人三井報恩会の理事長である。また職前は五十万人の従業員を擁していたといわれる住友財閥の家長である住友吉左衛門氏はMRAに献身している。また元広島市長の浜井信三氏夫妻、全造船労働組合中央執行委員長柳沢錬造氏夫妻などがあつた。

しかし大体昨年から今年にわたつては主として青年団指導者が主体となつて構成されていることが特色である。今年の参加代表者ではないが、現衆議院議長星高二郎氏や、社会党の加藤シヅエ氏等は日本におけるMRA推進の大きな力となっている人々で忘れられてはならないことであろう。

青年団指導者として参加している人々はその多くが各県の青年団長が若しくは副団長として要職を占めている人たちである。

青年団以外からは日本健青会から委員長他二名が参加した。

MRAについて

アメリカ・ペンシルバニア州生れのフランク・ブクマン博士はMRAの創始者で今年八十才になる。そして彼は日本に八回も来たことがあり、大の日本びいきである。

ブクマン博士は青年時代から大きな理想に燃えていた。

しかしこの人がただの理想家に終らなかつた理由には二つある。第一は、問題解決の鍵は理論よりも体験の中に見いさるべきであるといふことである。第二の点は、フランク・ブクマンにとっては彼自ら

得た事実は、大切にただ一人で秘蔵すべきものではなく、他の人びとのために活用すべきものであるということである。「神についての体験を消失してしまわないようにする最善の方法は、それを人から人へと分ちあつて、伝えてゆくことである」と彼はいう。精神的道義的なものを基盤とした世界大の革命を、各国で何百万の大衆が熱心切実にもとめていたので、この方法が限らない発展性をもっているとは彼は囁きかけている。

M R A の最初の体験は、イギリスの湖のほとりで行なわれた。当時ブックマンは丁度それまでもついていた仕事を辞職した。ある貧しい人たちの子供のために建てられた学校の舎監をしていた青年フランクは、その学校の運営にあつた六人の理事たちが、予算の關係上食費をへらすと決定したのに憤慨して、「子供たちの食事をへらすことは我儘出来ん」と評表を叩きつけたのだ。

心たのしまず旅に出たブックマン博士は小さなイギリスの湖のほとりで、フト気がついた。「彼ら六人は間違つていた。それは確かだ。しかしその彼らをこうして憎みつづけることそれ自体は罪だ」と。

そしてブックマンは六人の人びとに自分が憎んでいたことを謝罪する手紙を書いた。その経験のある学生に話した時、その場で学生が同じく変わる体験をした。それは一九〇八年のことである。一人また一人と彼は人びとに接して友人をつくつていった。第一次世界大戦が終り、一九二一年、フランク・ブックマンは、軍縮会議の代表者たちに会うべくイギリス代表部の軍事委員に招かれてワシントンへ行つた。当時、連盟や国際協定などがこの世界から戦争を一掃してしまつたら

うとの一般の期待が強かつたが、しかし彼は、一人びとりの個人性の格を変える効果的な力が国の場合にも適用されるのでなければ、何事も成功しないだろうとの固い信念をもつていた。

そうした初期の数年間、彼の主なる仕事は指導者の選択と訓練であつた。いろいろの人が彼の教えをうけに集り、生涯彼の許にとどまつた。他の人ならば組織を打ちたてるところを、彼は人から人へという有機的なつながりの育成に力を注いだ。他の人びとが宣言だけによつて世界に呼びかけているとき、彼は実際に世界を一つの家族に作りあげてきた。当時も今と同じく、彼は何人をも誓約や契約によつて、あるいは射的その他の關係によつて自分に結びつけることをしなかつた。彼を中心として何千という人たちは、打ち破ることのできない深い思いやりと全幅の真心で強く結びついている。彼は指令というものを一度も発しなかつた。各人は自ら直接に神によつて導かれるという自由をもっているのである。

彼の仕事は年ごとに大きくなり、国から国へと拡がった。一九三八年の初夏、ヨーロッパは神経戦におそわれていた。ヒットラーがオーストリアに進駐したので、民主主義諸国は狼狽して、国防施設の拡充を急いでいた。それと同時に、戦斗的なイデオロギーの挑戦に対して閉結の精神が必要だということが、これらの國ぐにますます強く感じられるようになった。

一九三八年五月二十九日、イギリス労働運動の発祥地であるロンドンのイースト・ハム公会堂で彼のために祝賀会が催されたとき、ブックマン博士はM R A を発足させた。

當時彼が行ったM.R.A.発足の世界放送演説を抜粋してみよう。

「世界の現状は不安と憂慮の原因にならざるを得ません。国と国、労働者と資本家、階級と階級の間など、いたるところに敵対心が盛り上っています。憎悪と恐怖による犠牲は日一日と増大しています。軌條と挫折とは、われわれの家庭の土台を破壊しつつあります。

このような時代に、個人と国とを癒し、満足な回復を早く与えてくれるという希望をもたらず療法はあるでしょうか？

その療法は、われわれが母の膝の下で学んでいながら、すでに忘れてしまつたか、それともなおざりにした日常平凡な真理、すなわち、正直、純潔、無私、愛にもどることの中にあるのではないのでしょうか？

根本的に言つて現在の危機は道義的な危機です。この危機に臨んで、国々には道義的に再武装しなければなりません。道徳的回復は本質的には経済的回復の先駆をなすものであります。絶対正直、絶対無私が満潮のごとく盛り上つて国々を洗い流した場合を想像してごらん下さい。そこにどういふ結果が現われるでしょうか？税金はどうなりますか？借財は？貯金は？無私の大波が国々にをひと洗いすれば、戦争は跡を絶つてでしょう。道義的回復は危機回復を実現することが出来るのでしょうか？それには人間の性質を変えて、人と人との間に、党派と党派の間に橋をかける強い力が必要です。これはめいめいが相手の非をあばく代りに、自分自身の過ちを認めるときに始まります。

神のみが人間の性質を変える力をもっています。

人間が勝れば神は語り、人間が従えば神は働く、人間が変れば国は変わる、という忘れられた偉大な真理の中に秘訣があります。その力が少数の人の中に積極的に働くとき、国家の問題も解決されるでしょう。指導者たちが変われば、国民の考え方も変わる。そうならば世界は安泰になります。

「われわれは世界を再造する者」——これは普通の人がどの考えであり、希望ではないでしょうか？大抵の人間は他の人が正直になり、他の国が自分の国に対して平和であつてほしいと思ひます。われわれはみな獲ることを望みますが、指導者たちが変つたら、われわれは与えることを欲するようになるでしょう。この新しい精神の中に、経済的回復を麻痺させている諸問題への解答を見出すことが出来るでしょう。

みな十分に思ひやりをもち、十分に分け合うならば、みな十分にうるおうのではないのでしょうか？世界には各人の必要を満たすだけのものは十分にあります。しかし、各人の貪欲を満たすだけのものはありません。

人びとの中に新しい精神が出来てこそ初めて産業の中にも新しい精神ができます。産業は新しい秩序の先駆者となり、利己主義の代りに国家的奉仕の精神をもち、神の導きを基礎として産業の計画を打ち立てることが出来ます。労働者と経営者と資本家とが神の導きの下に協力するとき、産業は国民生活の中で本来の使命を果すようになります。

新しい人、新しい家庭、新しい産業、新しい国、新しい世界。」

マキノの生活

金 沢 作 田 勝

私は四十日間、米國で多くの人達の愛に満ちた指導によつて、何を学び、何を感じたかと今、離米にあつて考えて見た。

日印勤勞交換の爲の訪印を止め、このマキノへ来た私は、ずい分と勝手な事を言い、勝手な行動をし、多くの人々を苦しめたことと思う。全く今、考へてみると恥かしい事でもあり、自分が自分で嫌になると共に、私達の行動に終始愛の導きをして下さつた方々に、深く感謝せざるを得ません。

偉大なブックマン博士の教える四つの絶対標準、「正直」「純潔」「愛」「無私」と「誰が正しいか」ではなく、「何が正しいか」で私の前に立ちふさがつてゐる障害に毎日斗つて行き度いと思つています。『純潔があればある程』!!

併し、この斗いは苦しい事だ。今になって、今少しマキノで皆の御指導をもつとたくさん得て、もつともつと強い力強い信念を獲得しておけば良かったと思ふ。

けれども、多くのすばらしい人々と友になる事が出来た。又私には特に、フィリッピンの青年達とは生涯の友となるであろう。彼等を早く日本に呼ぶ事が出来る様に私達は斗いを今すぐに始めなければならぬ。マキノに於ける生活が、私達とアジアの友達との旅行が無駄にならない様に！世界の平和を目指して！

M R A と日韓關係

富 山 須 河 裕

四つの絶対標準とM R Aの物の考え方、そして身につける方法（ガイドランス）等、これが融合への要素であり、人類社会に必要なアイディアである事を教えられ、現実これを見、体験して来た事は私の生涯に於て忘れ得ざる経験であり新しい人生への在り方であり、勝ちとらねばな

らぬと決意するのであります。M R A のイデオロギーがより多くの人々の心にくい入り、大きな勢力となって世界の平和を招来する事を確信し、又そうした世界を想像する時にこそ自己の責任を痛感するとともに生甲斐を覚ゆるのであります。

マキノの生活を通じて一番心に残るのは人々の暖かきであり、几帳面な清潔さである。集合生活や団体生活では時には厄難を極めるものであるが……。生活の中での印象はやはり韓国である。感情的に生きていた彼等がM R A に生きて本然と心の扉を開き握手をし、日韓關係に新しいエポックを築いたことは、必ず将来の日韓の間に何かしら新事態が生れるという確信をもった。これだけでも大きな収穫であるという自信を捨てる事は出来ない。

望むらくはM R A の斗いにより大きい迫力が必要である事を……指導者も、そして戦わんとする人々も……

本大会の副産物としてアメリカ各地を視察し、より多くを学び得た事につき感謝以外に何物もない。そして楽しく旅行をした同僚先輩に心から敬意を表し各位の健康を祈る者であります。

M R A の 挑 戦

兵 庫 安 井 淳 三

私の生涯にとって生れて初めて最も大きな挑戦をうけたM R A 世界大会!! 尊い体験と数々の勉学、人生への湧き出す新しい息吹き、平和と融合を解決する世界の一大イデオロギーとしてのM R A の勢力をひしひしと身に感じ、この精神、この思想こそが世界の人々が求めて止まぬものであり、この斗いに勝つことが新しい世界を造るものであるとの確信を深めた。本当に心からブツクマン博士をはじめ一カ月半起居飲食を共にした全世界のM R A 大会参加の人々に感謝したい。

私は静かにガイダンスを持った。四つの絶対標準を生涯の伴侶として、一步一步私自身を変え、正しく明るい家庭と融合した職場、にくしみや不安のない社会を造るための要素になることを!!

躍進の日月二、三の成果の大ならんことを希求し、確信をもって。

苦しかつたマキノ

鹿見島 砂 坂 実

僕は、人一倍わがままで見栄坊だ。人が少しでも僕の批判をすると、内心だけでなく顔にも出して不快になるし、又若しもそれが見えすいた事ではあつても、おだてたり、お世辭を云われると、ニコニコしてゐる。そんな僕にとつてマキノは楽しく過ごせる所ではなかつた。それは余りにも不道徳な人間であつた僕に対する良心の戦いが続けられたからだ。そして僕は、悪いそして不道徳な人間としての僕に未練を感じ乍らも、僕のそのかたくななものが、次々と崩れ去つて行く事を認めなければならなかつた。正しい事には何人も如何なる力も勝てない事を知つた。僕の長い人生の中で再び得る事の出来ない偉大な教訓と試練であつた。

沖繩とアメリカの融合

沖 繩 尚 註

私達は、初めて沖繩からM.R.A大会に招待された。マキノでの生活及びワシントンその他主要都市を、チームの方々と共に廻り、其の中で発見したのは、四つの絶対標準を通じ人種、國教、宗教をこえて、あらゆる國々の心からの融合の姿であつた。

これは、今迄、私が体験して来た社会、殊に沖繩に於ては、想像もし得なかつた世界であつた。

四つの標準に照らして、自己を変える事により、他人を変え、世界を再造する新しいこのイデオロギーは、階級斗争を事とする共産主義には勿論の事、物質主義的な現在のアメリカ資本主義にも、絶対必要なものである事を痛感した。

しかし、このイデオロギーは、実に厳しいものであり、マキノを離れて、現実社会で、どう生かして行くかと云う事は、これから、我々に与えられた大きな問題であり試練であると思ふ。しかし、其の目標に向つて努力する事により、今迄の私、即ち、自我の固りだつたものが少しづつ変わり、それに依つて、次第に周囲が、そして、沖繩と米國が変わり、その關係が融和出来るものと信ずる。一朝一夕には、とても望めない事で

はあるだろうけれども私は、其の希望は捨てず、一歩づつでも前進を続けたい。

自己生活の確立を

奈良 藤 本 勇

国際的な集團生活の場において、多面的な總和によって進歩向上する人間本来の姿を通じて、世界人としての生活態度の確立化への自信と勇氣を深め、たかめられたことは、まことに喜ばしく感謝する。

しかし、そのことを、隔離的存在ではなく、現実の生活環境にあって、いかに生かして行くかを簡潔に表現することは、M R A のもつ精神の深遠さを方法技術の形態から、現実なり視角によって、反動的な側面がとり残され困難である。

けれども、個人と世界の社会的關係、殊に人間關係は「家庭の課題は世界の課題に通ずる」ものであることを理解しながら、實際的な解答は、自分の生活以外のところにおいて求め勝であった態度を是正し、確信を得たことの一面は、將來の生活に具体的な明るさを感じる。

実践の中においてこそ理解出来る基本的修練の不完全さから、哲学、計画、情熱の理解論的解釈に不十分さを感じ、組織のないところに組織を感じとり、自覚性を主体とするところに、圧迫、迎合を感じたり、ガイダンスに統一性を感じたりすることは、今尚さびしいことである。

これは四つの道徳標準によりM R A を生かすことのみ解消される。けれどもM R A を口にし、体験することによって自己満足と徳善性を位置づけ、利用するものに対しては、きびしくとりくみ、先ず自己の生活をたかめて行きたい。

自分から変わる

佐 賀 吉 原 羊 一 郎

今夏M R A 世界大会に日本青年代表団の一員として出席しました。M R A とは新興宗教の一つだろうぐらいに考えて、アメリカを見学出来るという期待のみしか持たずに出席しました。先ずM R A とは人がかわる事によって家族をかえ、社会をかえ、世界をかえるのだと教わりまし

た。「それくらい青年団では、ずっと前からやっている。婦人の地位の向上、人格養成、村づくり、国づくり等すべてそうだ」と鼻高々で毎日のミーチング(会合)に出ていました。ところが、果たしてあなたがたそれを実行していますかと問われて返答に困りました。婦人の地位の向上を図ると言いながら自分の妻をしいたげて来ましたが、元来七年間の交際の後、結婚した私達は、お互いが大変理解し合つてとても外からは羨まれて生きてきたのです。しかし相手に不足があつても、それを理解しているという名目の下に不満を言わず、これが俺の家内だと語っていました、だから表面上は少しも喧嘩などせず、従つて外見は大へんりっぱにみえたに違いありません。私はその不満を他の女に求めていたのです。音楽やダンスが好きで今まで音楽愛好会の会員やフットダンスクラブの会長として自分の趣味を活かしてきましたが、そうした時に家での不満を求めていたのです。キャバレーの女、バーの女、そしてクラブの会員などと酒を飲んだり、話をしたりすることによって満たされてきました。妻も表面には出しませんが、そうした事を感じて内心不満に思つていたに違いありません。又青年団に於てはどうであつたか。自分の野心を満たす為に他の役員の黒口を言い、他を攻撃する事によつて自分の地位が築かれると思つていました。現職の副団長と表面では非常に仲がよく起居も殆んど共にしていましたが、内心では自分の嫉妬からすごい憎しみを持つていました。その様な私が仲間作りの理論を喋つていたのです。どうしてこれで青年団の理想が達成されましようか。

最初の一週間は完全にたたきめされ苦しみました。青年団で鍛えられた斗争心(自己保存の為の)や雄弁(自己防衛の為の)で相当抵抗しましたが、自分一人になって部屋に帰ると非常に淋しく、自分が醜く見えてなりませんでした。人には言いませんでしたけれども、それから少しづつ四つの標準に自分の生活を照らし合せてみました。正直、純潔、無私、愛の四つがM.R.A.の絶対標準になっています。しかもその全てに於て自分が裏切る様な生活をしてきたのです。妻に謝罪し、友人に詫げる事がいかにばかしく、おそろしく、又自分のちっぽけなプライドと戦つた事か……。しかし妻からも友人からも一通の手紙も受取りませんでした。その為にM.R.A.をのろい、早く帰る事のみを願う様になつていました。そうしたなか血洗いチームの友人たちが励ましてくれて妻や友人の為に祈つてくれる姿をみて再び勇気づけられました。しかも彼等こそ絶対に生き、喜んで働いているのです。私もこれだと思ひました。理論ではなくて活きる事だと悟りました。そうした時に劇明日への道の一役を貰い、元来好きな道なのでこれに一生懸命頑張りました。これで自分が一人変る事で相手に何物かを与え得るといふ確信を得ました。このことは新しいアジアの融合を描いた劇「アジアのあけぼの」で決定的となりました。自分一人でも世界の一員として与える事が出来、世界再造の為に働か得るのだという確信は外務大臣以上の力があるのだと本気に考えられる様になりました。こうなると妻からの不音や友人の無沙汰など問題ではなくなり、却つて相手の立場を考えてやるようになっていました。相手に与える時の喜びはたとえようありません。こうして絶対の標準に活きる時に神は導きを与え、奇蹟と思われような行為をします。妻の気持は全然わからないまま帰りますが必ず神が私の氣

持を伝えてくれる事を信じます。はじめの様なおそれとかはづかしさなど少しもありません。とても朗らかで楽しい日です。この様なすばらしい体験を与えてくれたM.R.A.の仲間達に感謝の念で一ぱいです。M.R.A.こそが今まで青年団が掲げてきたスローガンなのです。右でもなく左でもなく、私達青年が真直ぐに進む時に神はきつとすばらしい社会を、世界を与えてくれるものと信じます。この戦いの為に微力を尽す覚悟です。皆さんと共にやりましょう!!

理論より実践

奈良 網 干 壽 宏

人間生活は常に人間行動の連鎖現象であり、四つの道徳標準に基づく人間の行為によって、道徳生活即ち社会生活をより高度化して、それをも更に発展せしめ、世界全人類に及ぼそうとする情熱と実践力は誠に偉大なものと云わなければならない。こうした雰囲気は一カ月余り暮らして「理論でなく実践である」ことを学習し体得することが出来、しかもそれが世界の多くの人々との集団生活の中で得られた事は生証され得ぬ印象として残るだろう。

只我々少数者が良心に聴聞したガイダンスも一部の独裁的偽善者によってガイダンスの美名のもとすべてが計れる事について将来に対する若干の疑問を心に持たざるを得ない。

更に「個人行為が正しく持たれる時、世界の融合と世界の現在課題が解決する」理論的解釈は現にその通りであつても、実際に於いて、ソ連、中共即ち共産圏を含まぬアメリカを中心とした極く限られた国々及び「元何々、父は元何々」それどころか「祖父は元何々」と云つた人々の間に於いて世界大会と称し如何に叫び、実践しても飛躍も甚だしく、「現代の世界的課題を解決する勢力」「アメリカに与える」と大言豪語したところで将に気狂人沙汰である。それよりも寧ろ現段階に於いてはひた向きに個人が四つの標準に照らし生き抜くべきであらう。

すべての人々に必要なもの

愛 知 鈴 木 昭 夫

私はMRAのほんとうに何たるかを知らずに参加しましたが、全く多くのものを与えられました。今の世界は、あらゆる人間の欲望が極まり、人間のもつ醜くさはますます助長されている、あらゆる社会現象がまともな状態とは云えない。人間社会に根本からの救いが必要ならぬと思ふ。普遍的な道義的価値をもつこと以外に道はないではなからうか。

根本の人間の改造がなされなければ社会の真の変革もあり得ない。われわれは世界の融合と平和について多くを語るがそれが本当に自分の身近かな家庭の中で、社会の中で融合ができていくかどうか。自らの家庭、友人が融合できなくては所詮夢物語りでしかないのである。自己の人間性への挑戦はきびしいものであり、自我、自尊心をとり去ることは大へんな努力である、それは毎日毎日とその努力であり自らの改造でなければならぬ。そしてそれは誰が正しいかでなく、何が正しいかの基準にたつて考えることである。

ほんとうに人間の心を開いていくものはないかであり、与えるということであろう。人間の心を開いていくことは融合である。ワイルド・ハンソン君は、毎晩、要朝私の起床する時間をきいていつもその時にコーヒーを運んでくれた——今から考えるとそれは大変な献身である。マキノでの差別のない融合の姿や、ついには韓国やフィリッピンをはじめ諸国との深い融和は、全く新しい世界の間像を見せつけられた感じである。

この心の中に点ぜられた燈は消え失せないであらう。それは新しい生活への決意であり、それは言葉ではなく自分の生活すべてであり、自分の体全体でぶつかっていくことである。MRAの精神はすべての人々に必要であり、新しい世界への大きな解答であると確信する。MRAは世界のすべての間、階級、人種をのりこえて融合するものだと信じ、日本がアジアの中で一員として大きな役割を果たさなければならぬことである。そしてMRAのいき方自体が、今後とも形式化することなく、大きく正しく拡がっていくことを希望して止まない。

韓国との融合

兵 車 横 山 忠 雄

MRAは、はげしい世界の歴史の潮流のなかで正しい流れとするための大きな支えとなっている。物質主義はこの流れを人類滅亡の方向に引きずろうとしている。精神革命を目ざすMRAは新しい世界の再建のためにつき進んでいる。わたしたちは眼前に展開されて変りつつある驚異すべき事実を目を掩うことは許されないのであろう。今次の世界大会においてわたしは韓国代表に対し、必ずしも好感をもったわけではなかった。彼らの対日憎悪は想像以上に深刻なものがあつた。わたしたち、日本代表としても心は決しておだやかなものでないものも少くなかつた。しかし全アジア代表百二十名のワシントン、ニューヨーク方面の旅行はたしかに一つの契機を与えた。そしてMRA劇「明日への道」は大きな感銘を与えた。韓国代表の一員は壇上に飛び上つて、この劇は韓国へ持つて行き、多くの韓国人に見せるべきだと云つた。日本の代表が演じたボナンザ、韓国代表のコーラスに日本代表が加わつて韓国の民謡をともし歌うなど、日本と韓国との融合はまざまざとわれらに見せつけられた。

わたしはマキノを去る日にミーティングに出たときの感激を忘れない。ブックマン博士がじつと聞いていた。その日に帰る七名の韓国人と偶然にも同じ船、同じ飛行機であつたのはたしかに奇遇である。率直にわたしはそのよるこびを述べた。わたしのガイダンスはいまこそ韓国との融合に積極的になれということであつた。わたしは石井君とシガゴで一泊してからロスアンゼルスでMRA宿舎に到着した。ここで再び韓国代表と一緒になつた。丁度疲弊気味であつたわたしを慰めてくれたのは外ならぬ韓国人の人々であつた。第一物産ロスアンゼルス支店長矢野夫妻は某日韓国代表と日本代表を招待された。洪氏は友人のロス駐在領事の招宴を断つて出席したし、某韓国代表はこんなことは始めてですと感に堪えなかつた。ロスアンゼルスでの韓国と日本との融合は全く素晴らしいものであつた。九月十二日わたしたち五名の日本代表はJALに乗つた。久しぶりに日本の新聞をむさばるるように読んだ。日本の世論は決して韓国に対して良くない。わたしの斗いは実はこれから始まるのだと飛行機のなかでひとりごとをいっていた。

世界の解答

福岡井邦一

MRAの音楽劇「わが生涯最高の経験」を観たとき、わたくしの耳に深く残った言葉がある。それはミュージカル・スマイスの演ずる黒人教育者メアリー・ベズトン女史が、自分の教えた青年たちが、自分の意志にそむいて、白人への憎しみから共産主義へ引きずられていくの嘆きをソロで歌う場面である。

「この世界に

エクスパートはますますふえ

答辯は、ますます拡がる。

それなのに、人々は、

ますます憎しみ合い、融和しようとしぬい……」

わたくしは、この言葉のなかに、MRAの持つている動機——憎しみは世界に平和をもたらすための解答ではない——を身近かに感じとることが出来た。

わたくしたちは、いま近代文明の頂点である時代を生きている。わたくしたちは限りなく便利に進化していく社会にあって、一方、原水爆の恐怖におびえなければならぬ。文明は進んでも、人々は限りなく不安である。それは、われわれの周囲の物質文明のなかに、数多くの不信や不平等、そして憎悪……が作用し合っているからである。

このように不信は不信を生み、混乱はさらに混乱を招く、現代のシステムに対する解答をMRAは示したのである。
MRAの首唱者、ブックマン博士は「人間の改造」という本の中で、次の様に言っている。

「……現代人は三つの大きな仕事に直面しています。平和を保ち、それを恒久的にすること。世界の富と仕事をすべての人のものとし、何人のサク取にも委ねないこと。それから平和と繁栄とを、われわれの主人公としてではなく、われわれの僕として新しい世界をつくり、新しい文化を創造し、そうして黄金時代にすることです。」

わたくしはマキノでの生活から多くのものを学びとった。

殊に、個人生活や家庭の中で、みんなと本当に融合が出来ず、したい放題に気まま勝手なことをやっている自分が青年団の幹部として、果たして、多くの青年に対して確信を持って与え得る何があるのだろうか！ わたくしはの四つの絶対標準である正直、純潔、無私、愛の精神の中で自分を省みたとき、全く誤った生き方をしてきている自分を認めないわけにはいかなかった。

自分の弱点を知り、かつそれを認めると言うことは、イヤなものはない、しかしわたくしが正しく生きるためには、イヤでもそこから始めなくてはならなかった。

それは、現在の世界の混乱や、無秩序のなかに知らず知らずに、自分もその責任の一端を持っていたことに気付いたからである。

口だけでいくら偉そうに世界の平和を叫んでみても、親と仲が悪かったり、子供に対してウソのある父親であったり、不純潔であったりしたのでは、全く無意味であるどころかナンセンスでさえある。

MRAで云う神の計画のなかに生きると言うこと、それは絶対に正直な自分の良心に従って生きることである。

わたくしは、MRAを知ったいま、これからの自分の生活を、そして青年運動を「誰が正しいかではなく、何が正しいか」と言う判断のなかで、自らを持し、四つの標準のなかに生きて、自分の信念に徹しなければならないことを決意している。

アメリカ旅行記

ワシントン

八月七日 早朝マキノを出発したMRA大会のアジア諸国参加代表百二十名(内日本代表六十五名)は二台の飛行機を借切つてワシントンへ出発した。

午後十四時二十五分、ワシントン空港に到着、ワシントンにいるMRAの人たちの出迎えをうけて各々車に分乗して市内に入る。宿舎は、ワシントンの中心街にあるウイラード・ホテル。このホテルは明治維新によって、明治の新政府が出来たとき、初めての日本人使節としてアメリカへ来た岩倉使節が泊つたという由緒あるところである。その供のなかに福沢諭吉もいたそうである。

夜八時三〇分、ワシントンの古くからあるので有名なナショナル劇場に、MRAの音楽劇「生涯の最高の経験」を飽にいく。この劇は二カ月の長きにわたつて公演され、この間約八万人の観客を動員して、ワシントン市始まつて以来の記録破りな盛況をもたらしたことを聞かされた。

劇の内容は、アメリカの黒人教育者として活躍し、大統領顧問にまでなったメアリー・ベスーン女史の生涯を描いたもので、夫人が黒人

の教育の為に生涯を捧げ、遂にMRAの中に新しい生涯を見出した遊程がダイナミックに展開される感動的なものである。

さらにこの劇の素晴らしさは、その配役である。

主役のベスーン夫人には、ブロードウェイで大当りをした音楽劇「サウスパシフィック」に共演し、また十年余ロンドンで世界的名声を博したアルト歌手ミリエル・スマイスが扮し、その助演者として映画「パジャマゲーム」に出演し、またテレビの人気女優であるアン・バックルスが出ているといふ豪華版である。

この劇をみるために、ワシントンの人々は時間前になると、劇場前に何百米という行列を作つて待受ける姿を、わたくしたちは目の前に眺めることが出来た。

こうしたアメリカの人種問題に、新たな解答を投げかけた「生涯の最高の経験」の舞台は全く素晴らしい迫力でわたくしたちの胸を打つた。

この劇をみた劇作家、菅原卓氏の所説が七月三日の朝日新聞に掲載されているので参考までに抜すいしてみる。

米国で見た「温い革命」 菅原卓

「ワシントンにきたのは、この首都の劇場で、温い革命が行われているから、ぜひ行け」ということだったのである。

早速、その晩と翌の晩とつづけて観た。「崇高なる経験」と呼ぶ、ミューシカル・プレーで、ミリエル・スマイスなる女優が主役を演じ

ている。そのスマイス嬢は「カルメン・ジョーンズ」等で鳴らした黒人の歌手俳優である。

なるほど、そのポリュームは、すばらしいものだ……。

元來が、この劇は商業演劇ではなく、MRAと称する全世界をつなぐ思想団体の、祈りそのものなのだ。

従って全身全霊を打ちこんで、今日の一流の舞台芸術家が、歌と演技を示してくれるのである。その場合、どういふことになるかは、通常のロングランの舞台や、リサイクルで感じられるものとは、恐ろしくちがったものになることを承知した。人間の表現の一つの頂点と可能性を論らされたわけである。

そのことよりも、この一六六〇の座席を持つ劇場内のふんいきが、特別なものであった。八時半開場の以前に、往來はつづく限りの人の列となる。それは演劇にとって、なにも、特別な現象ではないが、その人の配列の特別なことに眼をみはらざるをえない。

整然と並び、割り込みはむろんないが、人種の品評会そのものである。白、黒、黄、茶……、劇場内部も、同様である。

現代のアメリカの最も自信のない人種問題に、メスを突きさしたのが、この劇のねらいであり、それをワシントンの真ん中で公演し、しかも、毎晩百数十人が、札どめに会い、また明晩もあえて列の中に立つというの、やはり一種の革命が行われているのであろう。

とにかく、この革命は、場内の拍手が鳴りやまず、人種を越えて、なごやかなふんいきで、わきかえって幕となった。

そして、夜のペープメントを、黒い皮膚の人々が、赤や青色の車に

のり、白い色の人々が、黒や黄色に塗られた車をとばして消えてゆくのである。」

八月八日 午前十時十分、ナショナル劇場にてアジア各国代表を

迎えての大ミーティングが行われる。日本代表のなから、健育会の上野氏がMRAについての所信をヒレキする。次いで十一時、アジア各国代表の会員、ワシントン市庁を訪問、ワシントン市行政委員長マックローソン氏と会見、アジア人を代表してマハトマ・ガンジーの孫、ラジモハン、ガンジーがアジア各国の融和と、アメリカのアジアに対する立場についてスピーチする。日本代表からはワシントン市ボトマック河畔の樓を寄贈した屋崎翁の娘ムコとして相馬さんが紹介された。さらにこの席上で、MRA劇「生涯の最高の経験」主演者である、ウイリアム・スマイスと、アン・バッククルスの二名と、それにラジモハン・ガンジーに対して、ワシントン市の健が、各々のワシントンへ尽した功のもとに贈られた。最後に日本チームの合唱団が、マックローソン行政委員長、市長に対して「花」をうたつてはなむけた。

午後二時、農務省にベンソン農務長官を訪問、ベンソン長官の歓迎の挨拶を受ける。

午後六時、イリ氏宅に夕食を招待される。

八月九日 九時三十分、ホワイト・ハウスへ赴く、チニズリー大

統領付海軍武官の招へいによるものである。一般観覧者には入ることを許されていない美麗な貴賓室を見ることが出来た。ホワイト・ハウ

又見学を終へてすぐ二台のバスへ分乗してワシントン市内を遊覧する。軍の基地で有名なアリンソン基地や、ジェファーソン記念館等を見学する。

午後二時三十分、ナショナル劇場にて日本の劇「明日への道」を上演する。この上演は突然決つたので、わずか前一日しか準備期間がなくスタッフは勿論乍ら、特にバック・ステイジーの人たちの徹夜の準備の末、出来たものである。予想外に満員の観衆のなかでの真剣な祈りをこめた劇は、終つて後、観客総立ちになつての鳴りやまぬ拍手の中に幕を閉じたのである。

八月十日 この日は朝からワシントンの郊外にある、アメリカの父とも言ふべきワシントンの生家マウント・バーノンに行くことになつた。二台のバスに分乗して目的地についた一行は美しい景色を賞讃し乍ら、ここに育ち、ここに死んだ偉大なワシントンの生涯を思いやつた。

船道ポトマック河下流の河畔で、ピクニック気分よろしく特別に持参された五目寿司を食べる。日本以外のアジアの国の人々も始めての五目寿司の味に舌つつまをうった。

食事を終へると、歌を唱うグループや野球をするグループ等、久し振りに解放された野外でのレクリエーションをしばし楽しんだ。再びバスがワシントン市内に入ると、今日最後の目的地である、リンカーン記念館を訪れた。

午後六時三十分ワシントン・記念館の空高くそびえる下で、MRA

の野外大ベージュメントが開かれる。芝生の緑も鮮やかな広大な広場に集つた六千近い群衆は、二台のピアノの連弾に始まつた多様なプログラムの内に、MRAに生きることの不可欠なことを、スピーチのなかに、或は素晴らしいコーラスのなかに感じとつたことであらう。

アジアからも多くの人がスピーチのなかでMRAの確信を述べた。ラジモハン・ガンジの司会によつて日本からは洪沢栄一の孫になる洪沢雅英さん、元広島市長の浜井さん夫妻、三井さん夫妻等スピーチをされ、聴衆に深い感銘を与えた。また日本のコーラスが「君」「朝」の歌、女声だけの「お江戸日本橋」等で喝采をあげ、更にアジアの各国の人が集つてアジアのコーラスを編成して韓国の歌「アリアン」がアジアの融和の姿ながらに力強く唱われた。

八月十一日 ワシントン滞在最後の日である。上院議員イリー氏の招待で、午前一〇時合衆国議事堂を訪問する。マッカーサー元帥が議事に喚問されて「老兵は黙つて去るのみ」の有名な演説をした議場のなかで、全員議席に着席して関係者からの歓迎の言葉を受けた。

午後三時にはワシントン空港を発たなければならないあわたたしきのなかに、日本大使館から昼食の招待があつた。全員はともども応じられないので、みんなの中から十一名だけが行くことになつた。

青年団関係者からは、石井、作田の両氏が選ばれ、これに三井夫妻、住友、白根、関、山本、鈴木さん等の十一名が定刻、大使館を訪れた。朝海大使夫妻と松平公使夫妻が温かく皆を歓迎して下さい。MRAについて、みんながそれぞれの所信を大使に話し、最後に大使の

激励をうけて大使館を辞した。

直に空港に向い三時五十分想い出多いワシントンと離れたのであ
る。

ニユーヨーク

全アジャ百二十名のメンバーは八月十一日三班に分れ、アメリカン
エアラインの飛行機でワシントンより舞台をニューヨークに移す。ニ
ューヨークより約四〇哩はなれたマウントキスコのデルウッドという
名の宏大な邸宅に着く。この邸宅は、MRA東部の強力な拠点ともな
っている。翌十二日は二班に分れて、一班はプロンクスのリバー通
にあるヤンキースタジアムで本場のプロ野球の醍醐味を満喫した。
他の一班はW四三番街のハドソン河に面した八十三番突堤よりサーク
ルラインの観光船でニューヨークの中核をなすマンハッタンをハドソ
ン河とイースト河で一周し、見学した。ハドソン河の河口の小さな島
であるベドロ島には余りにも著名な自由の女神像がある。三百呎の
高さで西紀一八八三年フランスが民主革命の先軍として、独立して百
余年しかたっていないがアメリカに贈ったものである。ハドソン河
に面してクシの歯のように多数の大きな波止場がある。恰度英国キ
ーナードラインのクイーンメリー号が出帆しているところと出会あう。
まるで動く巨城だ。多数の乗船客が群がるように甲板に出て手を振っ
ている。ハドソン河に面して日本NYKや三井船舶等の専用ドックも
見える。ハドソン河からイースト河に廻るマンハッタンの尖端部は世

界経済の心臓をなすウォール街のビルで想まる。イースト河口よりさ
かのぼり右手にブルックリン地区を眺め、マンハッタンとつなぐ巨大
なブルックリンブリッジ、マンハッタンブリッジの下を通るとエンパ
イヤー、クライスラト、ロックフェラー等のマンモスビル群の雄偉が
展開する。ぼう大なアメリカの持つ物質力と急速に進んだ近代科学の
粋がわれわれの目の前にパノラマの如く繰りひろげられている。
バスでデルウッド邸に帰還し、夜はマウントキスコ市長の観迎のこ
とばを受ける。

十二日、ブロードウェイチャムバー通のシテイホールにアジャM
RA勢力が訪問する。丁度公職選挙にあたり多忙らしく助役がわれわ
れを市議事堂に案内して歓迎の辞が述べられる。こは由緒深く、リ
ンカーンの葬儀はここで行われたし、いままでは幾多の著名な世界各
国の政治家が演説したという。市体育協会長の昼食の招待を受け、ア
スレティフッククラブを訪問、アジャ各国代表のスピーチが行われ、ニ
ューヨークのジャーナリストも見え、MRAが新しいイデオロギーを
もってアメリカに解答を興えていることが強調される。ここから特異な
形態のビルで世界各国の人々から頼まれていたる国連ビルを訪ねる。
丁度昨日から国連総会が開かれ、中近東問題をめぐり、はげしい緊張
が示されている。ガラスと鉄筋で作られているこのビルは近代芸術の
粋をこらし、訪問者の目を楽ませる。安全保障理事会、信託統治理
事会、経済社会理事会等の各会議場の見学し、最後に総会議場を見
る。国連加盟八十一カ国の議席があり、英語、フランス語、ロシア語、
スペイン語、中国が主に通訳されるが、ときには三五カ國語が同時に

通訳されることもあるという。一昨年日本の歴史的な国連加盟がこの会議場で決定されたことが思い出され、あれからの日本の国際地位の向上を考えて感慨深いものがある。ここで日本チームは太田東京銀行ニューヨーク支店長の招待で日本クラブに赴く。岸首相の署名入りの日本語の看板がニューヨークのビル街に掲げられているだけで、もう故園のおいがするようだ。握りずし、大阪ずしなどか山ほど用意され、一回久しぶりの日本料理に舌鼓を打つ。八時より西四十四番通マシソン街のルーズベルトホテルのホールでアジャMRAメンバーの夕が聞かれる。ニューヨーク一流のホテルであるだけに、招待された人々も盛装をこらし会場は超満員である。日本のコーラス、韓国の民謡、インドネシアの神秘的な踊り、フィリピンの陽気なダンス等々か賑やかにくりひろげられ、MRAの最近における目ざましい闘いの姿がニューヨークの各界指導者の目に力強くうつる。

デトロイト

オールアジャメンバーは八月十四日教班にわかれてニューヨーク飛行場よりT・W・A機に乗り、デトロイトに向う。デトロイト空港ロビーは広大で幾何学的な模様と間接照明で実に美しい。自動車の街らしく一九五九年生がサムプルにおかれて乗客の目を楽しませる。バスでダウンタウンのラフエニエット通りのフォートシエルビーホテルに一回は休憩をとる。大部分の人々が夕方までにデトロイトのMRA関係者宅に散ってゆく。一部はこのホテルに泊まる。翌十五日はフォード工

場の関係施設を見学。フォード氏はバックマン博士の知友であった。始めにフォード展示館に入る。

素晴らしい型の各種自動車、未来の自動車はスパーマンの如く、空中を飛び地上を疾駆するという未来の世界を想像したパノラマなど科学世界の空想は思わずわれわれの心を楽しくさせる。MRAの世界再建は支配のない搾取のない国家民族を超越した人間社会を目ざしている。この再建世界に人間が支配する素晴らしい科学の力が加わったならば人間は永遠に平和を楽しく保つてゆくことができるであろう。ここからグリーンフィールドヴィレッジに行く。約二〇〇エーカーにわたり、百余の各種の歴史的な建物があられ、その規模において、またこの種では世界一のものであろう。

ここではトーマス・エジソンが最初に電球を作った実験室がそのままあるし、ライト兄弟が始めて製作した飛行機、リンカーンが法律を勉強していた建物、初代ヘンリー・フォード誕生の家などそれは僅か二百年足らずの間に急速に強大な場となったアメリカの歴史を形成した数々の要素がこのグリーンフィールドに集約されているといっても過言でない。この地域にはまた世界最大の面積をもつといわれるヘンリー・フォード博物館がある。

建物面積だけでも一四エーカーある。現代アメリカを作り上げた開拓者精神はこの博物館の展示物によって容易に理解できるであろう。自動車の歴史の変遷を示す多くの展示物は正に天下の偉観である。機関車、ヨット、時計、蓄音機、ラジオ、ピストル、飛行機等あらゆる科学技術の歴史が示され、これらを丹念にみると、とても一週間

はずまない程である。

八時よりフォード文化会館でデトロイトの關係者とオールアジャムRAメンバリの盛大な夕食の宴とミーティングが行われる。今日は八月十五日で終戦記念日である。日本人は感慨深い日であるが、韓国とインドネシアの独立記念日である。韓国の独立を祝いそしてアジャム融合をうたい、アメリカは新しいイデオロギーをもたねばならないことが、強調された。

デトロイトは人口約二百万人でアメリカに於ける大都會であるが、自動車工業を主軸とする工業都市であり、労働者の都市でもある。約六万人が働くフォード工場構内を見たが、無数の自動車の駐車しているのを見て、それが殆んど労働者のものであることを知ったときは大きな驚きであった。しかし資本家と労働者との対立は資本主義社会においてはごくあたり前のことであろう。フォード会社の中にもMRAの融合の精神で労働協調に留意している人があり、MRAは日本の資本主義社会においても絶対必要なイデオロギーであろう。

ロスアンゼルス

八月二四日 七時ロス空港着、九時宿舍MRAクラブに入る。一一時

ミーティング、二時和歌山県人会ピクニックに参加

八月二五日 福島、松尾、増川、安井親、レバン氏案内でインデオの

農業労働者訪問、九時出発、一〇時帰着。作田、神東、砂坂、及川、綱干、藤本、須河、山根組オファクスナード

八月二六日

農業労働者訪問、三時出発、一〇時帰着

午前中市内見物、午後マリリンランド見学

ロスはドンヨリしている。これは特有のスモーグの爲である。スモーグとは自動車からはき出す排気ガスがロスの地形と気流の關係で、霧散し得ずに空にたまつて出来る現象なのである。之は人体にも相当な影響を及ぼすと云われる。又一步郊外に出ると一面に真赤に枯れ切つた世界だ、これは余り乾燥がひどい爲だ。冬になると青々となるという。日本とは全く逆なわけだ。このロスに約四万五千人の日本人が住んでいる。一世の人達も四年前に市民権を与えられて、晴れて米国人となつて暮しているのである。この一世は明治時代に移住した人達で、従つて全く典型的な日本の封建社会の思想で固められてる様だ。しかもその思想は二、三世達にも悪い面のみがうけつがれている様だ。つまり私達がよく口にする封建的な物の考え方を持つてゐるのだ。この事は最近、日本から難民救済、短期労働者で入つてゐる青年たちの訴えてゐる所によれば、日本よりも日系人の方がやりにくいと云つてゐる事がその事を裏づけしている。ほんの一部ではあるが私の会つた日系人も全くその通りであつた事に驚いた。二、三男対策の一助として政府農林省も相当に力を入れて仕事をすすめてゐるもの、同じ日本人であり乍ら、教育の違いから生じた思想的なアツレキが表面は美

しくよそおつていても、その底に流れている事を現実にかみせつけられたのである。此の溝を埋める事がロスの日系人市民の爲にも、日本人労働者たちにも一番必要な事ではないか？ そこにMRAに課せられた一つの使命がある事を感じた。

サンフランシスコ

アメリカ太平洋沿岸の玄関口ともいわれるサンフランシスコは人口八十万余、その周辺の衛星都市をふくめて約二百三〇万の大きな人口を有している。日本メンパーは当地の国際空港に着き、あるものは一泊し、あるものは市内観光に数時間を費いやす。MRAハウスは市内のメインストリートであるマーケット通のダウスタウンにある。MRAのなかまは未知であっても、お互いがMRAメンパーであるということを知るとあたかも旧知の如く、あたたかい親愛の情が示されるのである。シスコには日本人が多い。ダウスタウンを歩いてみるとよく日本人と出会う。サンフランシスコは三方から海に囲まれ、多くの丘陵があり、ロスアンゼルスと違って風とうしがよい。従ってわれわれがロスアンゼルスで自動車の排気ガスのために目を痛めたようなことはない。戦後人口の増大は目ざましく、限られたシスコの街から郊外に新居がどしどしと建設されてゆく。ブレンディオ高地の展望台にはクリストファ・コロンブスの大銅像がサンパブロ湾に向かって立っている。ここから著名な金門橋、オー克蘭ドリッジが眺められ、シ

スコ湾をへだててオー克蘭ドが望まれる。おだやかな丘陵が多いために名物のケールカーが上下して、繁雑なシスコの町にのんびりした一服の清涼剤を与える。帆船の林立する漁港地区はあまりにも日本とよく似ている。広大なアメリカで最も日本に近いサンフランシスコは何んとなく親しめる都市であろう。

アメリカ見たまま聞いたまま

アメリカの問題点 「アメリカ国内における問題は、人種問題と青少年問題である」と云うことをアメリカへ行く前から再三聞かされてきた。アメリカへ来てそれらが事実であることを直接アメリカ人の口から聞くことが出来た。数人の人から聞いたことを事実として書くのは正しきを得ないと思うが、やはり私達の耳目に触れた範囲でもと書いてみることにした。

人種問題 われわれが、またアメリカへ滞在している間にもアメリカ南部に於ける高校の黒人進学拒否の騒動がしばしば報ぜられた。それは何かわれわれには理解出来ない様な根深かきを持つてでもいるように、解決への道ははかどらない。

人種問題は確かにアメリカの最も鋭すべき弱点である。しかもそれにも増してその解決が困難であるのはどう云う事情からだろうか？

ワシントンでセンセーションを巻き起した「生涯の最高の経験」は、その前に人種問題のある南部の中心地アトランタで長期間にわたつて公演された。これと一諸に行を共にした、山崎、川口、若宮の諸氏の話を聞くと白人の黒人排斥が理クツで割り切れるものではなく、何代にもわたつて築かれてきた白人社会の伝統の中に育つてきている感情なので容易に、その妄を聞くことの出来ないそうである。それで

もMRAの人たちの真剣な闘いのなかで南部の人種問題も、多くの人たちに明るい解答を与え得たことは特筆すべきであろう。

一部の人たちの言によれば、黒人の生活程度の低いことや、増加するその人口、低い労働力等、そうした問題が黒人に対する反感反目の理由となつてはいる様であるが、これととも、必ずしもそうだと云うには問題が浅きに過ぎるクライがある。

リンカンの説いた、人種を超越した人間平等の精神のなかに、アメリカがよみがえるとき、本当にアメリカの偉大な特色が顕現されるべきである。

MRAが音楽劇「生涯の最高の経験」で解答を示した様に、何よりも先ず憎しみをお互いが捨て去つて謙虚になる以外に、この問題の解決はあり得ないであろう。

青少年問題 マキノでアメリカの青年男女が、いまのアメリカの青年の在り方を描いた劇をやつた。その第一景、あわただしい都会の騒音のなかに忙しげに行き交う人々、彼等は時間に追いかけて行っている様である。第二景、与太公のたまり場、六、七人の皮ジャンパーにナイフを持ったアンちゃん、さて次は何をやらうかと相談し合つている。彼等には生きる目的がない。第三景、ドヤドヤとコーヒー・ショップへ乱入してきた男女の一群が店の他の客の迷惑も尻目にロッキング・ロールを踊りだす。

第四景、家庭の場面、無気力な父親、ヒステリックな母親、見栄だけ一杯の年頃の妹、それから不良仲間とつき合っている青年のいる

家族、家の中でヒンピンと、金や酒がなくなる、みんながてんでに家族に当り散らす。——ざっとこういう内容である。この劇の場面が説明しているアメリカの青少年の不良化の問題は、いまアメリカに於ける重要な問題である。

この国でも青少年犯罪の増加に対する適切な処置が強く望まれている。

この為、いまアメリカの各地で青少年保護を目的としたクラブが作られたり、またボランテイア（問題青少年指導者）の増員等が対策されていくようである。

また、教会が、いままで青少年活動の中心であったのだが、最近教会へくる青少年が激減し、しかもきても男女交際の社交機関にはき連えられると言つた調子でこうした面での教会活動の立直りが要望されていた。

しかし、私たちが、マキノで会つた一部の青少年たち——なかにはニューヨークの不良団の頭目だったという青年もいた——は、青年たちの間にMRAが必要であることを、そしてそれをまず自分たちが身をもって実行していくことを力強く話していた。私たちは彼等の姿のなかに明日のアメリカの青年たちを見ることか出来たのである。

アメリカの教育 アメリカでは小学校をグラマラスクール、エレメンタリースクールと称し、日本の中学校はジュニアハイスクール、日本の高等学校はシニアハイスクールと称し、短期大学はシニアカレッジ、専科大学はカレッジ、総合大学はユニバシティーと称している。

義務年限は十二年である。

ロスアンゼルス市のウイリス・クレスト・スクールという小学校を見学する。生徒数六百名、一教室は平均三十四人でこれはカリフォルニア州の基準平均数とも合致しているという。児童の厚生については二名の看護婦をやり、専門医は週に一、二回巡回してくる。キャプテリヤは完備され、昼めしは生徒一人三〇セントで、安価に食べさせている。図書館の維持費はPTAが賄なっているようである。この学校ではとくに社会科教育に重点をおいている。新学年は九月五日からこのことであつた。

つぎにロスアンゼルスハイスクールに行く。三階建の格式のある堂々たる鉄筋ビルの建物である。ここはジュニアとシーニヤが一掃であるほか市教委の成人学校の施設まである。校長一名のほか副校長二名をやり、うち一名は婦人である。生徒数は二、六〇〇名、特別教室のうちとくに化学、物理教室の立派なのに驚く。図書室も完備し、約六千冊の蔵書があり、職業教育の一環として印刷機と道具一式が完備していた。大ホールは日本の地方都市の公会堂より立派なものであつた。なおアメリカの大学入学試験は日本ほどきびしくはなく、大部分の大学は入学試験はない。ただプリンストン、ハーバード、エリー、スタンフォード、デューク、マサチニセッツ工科大学、カリフォルニア工科大学には入学制限があり、ハイスクールの内申書及びその学級自体の審査が行われている。アメリカの学生の多数はアルバイトをしており、自分の学費を稼ぐものが多い。

一方アメリカの社会教育は官公庁よりも民間有志で行われているば

あいが多い。とくに青少年教育には民間有志がタッチしているばあいが多い。アメリカでは日本のような地域青年団は皆無であり、学生は学校のクラブ活動に入っているし、また何らかの社交クラブに関係するものが多い。青少年団体ではキリスト教会の青年部又はYMCA、YWCA等が比較的目立っている。しかしそれも大したものではないらしい。成人の各種クラブは実に多く、これらの社交クラブは何らかの社会奉仕をうたっており、事実、物質的奉仕をするものもある。従ってクラブは案外陰の存在としては無視できぬ力もあるようだ。しかし青少年運動は先述のようにアメリカの現下に直面する大きな問題点であるだけに重要な意味をもっている。

アメリカで見た農場 わたくしたち（石井、横山、三土）はロスアンゼルスで、やはりマキノへ来ていた、アルバート・ニューカム氏の農場へ招待された。

九月九日、わざわざ、われわれを迎えにきてくれたニールカム氏の冷房のきいた車に乗ってロスアンゼルスからは百三十マイル位離れていると云うインディア市まで、時速六十マイル位で飛ばし乍ら、約三時間後に彼の農場へ着くことが出来た。

そこはインディア市のコーチアラ谷と呼ばれている山に囲まれた盆地である。まず車を下りて驚いたことはそれまで冷房のきいた車の中なので気がつかなかったのだが、何んと外は百度を上廻る暑さなのである。一番暑い時は百二十度位あると云う大変な暑さなのである。しかもこの辺りは、メキシコに近い砂漠地帯なのである。こんなところ

でどんな農業が行われるのかと、途中の荒れ果てた砂漠を見ながら憂心暗気だったが、着いて見て驚いたことは、兎事な柑橘類や、綿、人参等し沢山の作物が実っていたことである。

いよいよ、実際に農場を見せて貰い、説明を聞くに及んで、その秘密が解ってきた。

それは、この地帯は戦争前までは、全くの不毛の砂漠でしかなかったのであるが、一九四八年に百二十五マイルもなれたコロラド河から灌漑水を引く運河が作られた。今から約十年前である。それ以来、いくら水をやっても一べんで涸いてしまふ砂漠と人との闘いが始まり、十年に及んで遂に人間が自然を征服した綿畑にはメキシコ人労働者が綿つみをしていた。この綿は全米でも最も優秀なクラスで、その生産品は引っぱりだこだそうである。

ニールカム氏の農場は主として柑橘類の苗木の栽培をやって居り、その農場は、折紙つきの優秀なものだそうである。所有耕地面積は二百五十エーカーだから、日本式に言えば、百二十町歩である。

この農場の施設で目を引くのは、モトローラと称する二台三五〇〇ドルもする超短波送受信機があつて、広い農場で働く自動車に対して、作業指令を出せるようになっていゝことである。また、スモークと一緒に襲ってくる寒波に対して備えて苗木を守る、暖房施設が広い農場の間々まで行きわたっていることも感心させられた。

さらに特筆すべき事は、このニールカム氏の農場に、日本からの短期農業労働者が八人も働いていることだった。彼等は全部鹿児島県

人たちが他に六十五名と一緒にカルフォルニア州に昨年きた人たちの一部である。

三十二才前後の若い人たちがばかりで、わたくしは彼等のキャンプで一晩を共に寝て過した。わたくしたちは、ロスアンゼルスで短期農業労働者が、余りに良い労働条件でない為、いろいろの問題があることを聞いていたのだが、この農場でみた青年たちは「わたくしたちは、速くアメリカまで来て働くことのために、精神的なものを大きく学び取って帰るつもりだ」と振切って語ってくれた。

ニューカム氏が、わたくしたちを今から開拓すると言ふ砂漠へ案内して、その一物も生えそうにもない土地を指さして、「私は今からこの土地へ新しい生命を入れるのです」と語ってくれた言葉とあわせて、この青年たちの持っている気持ちに、わたくしたちは多くのものを学ばせられたのである。

夜、ニューカム氏は、わたくしたちの為に夕食の野饗会を開いてくれた、すぐ側にプールのある芝生の上で、やはりマキノで会った農場主レイバーン氏がこの日のコックを勤めてくれた。美味しい食事のあとで、この日集った附近の人に四十名余りの前でわたくしたちがマキノで得た決意と確信を述べた。日本の短期労働者の皆さんや、メキシコの労働者等も数多くこの日集ってくれた。MRAの精神が、こうして個人の生活のなかや、農場のなかでどの様に作用し合っているか、わたくしたちは目の前に、これらの人々の集会を通じて、さらに新たな確信を深めることが出来たのである。

アメリカの婦人 歩いていて先ず眼につくのは服装である。全てが個性的であり年令、流行、気候等に全然こだわらない。一般的にみても若い人はシックな服装をし、年が多くなるにつれて派手な服装になつてゐる。だから六十すぎたおばあさんが真赤なカーデガンを着ていてもひとつもおかしいと思はない。サックラインもニューヨークやワシントンで二、三人に会つただけだ。夏の暑い日にはショートパンツで出る。

次に歩く態度だ。日本では主人の影によりそう如く歩いている夫人が大へん美しい様に見えるが、ここは全く逆だ。夫人は胸を張って主人より前に歩いている。荷物は殆んど男性持ちである。又子供連れは少い。自動車に乗つていても子供は後の座席にやらせ、夫婦仲良く運転台に坐つてゐる。道路上の立話はない。勿論話すべきなのは女性の特權みたいなものだからないわけではない。しかし日本の井戸端会議などはしない。何曜日と決めて一人の家に集まりお茶とケーキでパーティを開くのだ。しかしこうしたところで他人の干渉や噂など殆んど話題にしない。子供に対する教育は非常に厳格だ。ハワイ空落の事であるが、三才ぐらいの子が母親に泣いて何かねだつていたが、母親は早速言う事をきかないと知ると子供をひきづるようにして便所の中に引き入れ折檻をしていた。出てきた時は子供は尚も泣きじやくつていたが、もうねだらうとはしなかった。他人の前ではやらない。それは子供の気持をきづつけない。又男女交際についてもやかましい。デートをする場合は相手は勿論場所や時間をはつきりたづねる。若し時間のがびる事があればすぐ電話してたしかめるぐらいだ。他人に対して

遠慮などしない。其様子は日本と同じく大変多いらしい。しかし職業は大分違っている。日本では会社のお茶くみや電話交換手、バス車掌等多いが、アメリカのバスは女の車掌なんて全然ない。男の運転手ただ一人である。マウントキスコ市では女の市長さんもいた。つまり男も女も同じ仕事をやっているわけだ。女給でも本当の職業人だ。チープルに各々自分の勢力範囲をもち事務的にテキパキと処理して行く。無駄なコピとかサービスはやらない。離婚の多いのは一つのアメリカの悩ましい。その原因がどこにあるかはしていいない。又休暇を一家あげて楽しむ事が多い、自分の車にテントを積んだり、ハウスを引張ってゆったりして速くへ出かけるのが好きだ。又一方小さい子供がいても家政婦なり祖母等にあげて夫婦で出かける事も出来る。小さい時から夫々独立の気をはせる意味からかもしれない。日本の男性で一番面喰うのはレディファーストだ。室の出入り、車の乗降等すべて女性が優先だ。うしろに女性がいると必らず戸をあげて男性は待たなければいけない。我々は何とも思はず戸をしめて先に入っていくとした。

アメリカの道路と自動車

豊村の道路はよく知らないが、都市及びその周辺並びに主要幹線道路は非常に整備され、まちの中では交叉を防ぐために架橋され、四階の立体交叉点も出来ている。それでも道路が狭く感じられ、各所にも道路拡張工事がなされている。この財源としてガソリン税があげられて、常に余裕があるという話も聞いた。自動車は生活の足で、一家で二台から三台は所有している。通

勤及び退庁時刻には自動車が五米ほどの間かくで走っており、一方道路では時速六〇から八〇哩で走っている。だからアメリカでは自動車は生活必需品であり、最新式のものから旧式のものまでさまざまである。しかしバスや電車を利用していても人もあつて、都会生活のなかには一台の自動車も持っていない人もいる。日本と比べてバスや電車の数が少ないのは、各家庭に自動車の普及が早かつたためともいわれる。まちを走ると賑わうが、光線が強いのと同時に、自動車から排出されるガスと微塵な粉末のため、この解決に迫られている。デトロイトでフォードの工場を見学した際に、ここでは一日千二百台の自動車がつくられ、五十五秒に一台の割合で生産されているという。アメリカにこれほど自動車を普及させたのはフォード第一世の努力によるところが大きいといわれるが、今から四十年前にT型自動車を三百七十五ドルで売り出した。当時自動車がこれほど安く手に入れることが出来なかつたので、今まで自動車を持っていなかつた人達の中にも急速に浸透していったといわれる。新しい型の自動車をつくるには約三億ドルの資金が必要といわれる。最も大きい会社はゼネラルモーターで、五十万の従業員をもち、次がフォードの二十五万人、続いてクライスラーの二十万人の順となる。自動車と住宅に重点をおくアメリカ人の生活は、一面よくもあるが反面に於てそれを持たなければならぬという不便さのあることも感じられた。

アメリカの旅行

わたくしたちのアメリカにおける旅行は、その殆んどが飛行機によつたので、他の交通機関である汽車や、自動車に

は、ほんのわずかししか乗る機会がなかった。それにしても感じたことは、アメリカの広いせいでもあろうけれども長距離交通機関が、実によく発達していると言うことである。

飛行機の旅——アメリカの大きな都市にたいいて二つ以上の飛行場がある。確かにこの国では飛行機は最も急速に発達した交通機関であることが、数多い飛行機会社と、やたらに多い旅客機の数で判然とされる。

シカゴの空港は、その規模でアメリカでも有数のものだそうであるが、この一日の飛行機の発着数は千台、一分間一台の割合で飛行機が発着している計算になるそうである。シカゴからロスアンゼルスへ向う際小学校の二、三年生位の女の子が一人旅をしているのに出会ったが、飛行機がすべての人に利用されていることは全く日本のバスに於けるその様である。

わたくしたちが乗った飛行機は、数多くに上るが、会社別には、ユナイテッド・エア・ライン、キャピタル・エア・ライン、アメリカン・エア・ライン、トランス・ワールド・エア・ライン、等である。

機内の設備等もどれも完備し尽されているが、飛行機によつて違った特徴も見られて面白い。

ともあれ、終始非常に快適な空の旅が続けられたことは有難かつた。

バスの旅——デトロイトからマキノ・シテイまで八時間のバスの旅は、私たちに沿道のアメリカの風景を心ゆくまで楽しませてくれた。

第一、アメリカの道路が素晴らしい立派であることが、自動車の旅をこの上もなく快適なものにしてくれる。私たちが乗ったバスは、アメリカ全国を縦横に走っている最大のバス会社、グレイファンド会社のバスであったが、冷房のきく車内、安楽に後ろへ倒せるシート、日光の直射光を遮る紫外線除けの窓ガラス等、長距離旅行に必要な万全の設備がしてある。わたくしたちの乗ったバスにはなかったが、大体トイレットも完備されてあるそうである。但しバスの料金が高いのには驚ろかされた。ロスアンゼルスから四十マイル程離れた、サン・ベルナルディノからバスに乗った時二十ドル五十セントだけ取られたが、日本のバスでこの位の距離だとも、せいぜい三百円位のものである。

またバスに日本の様に車掌が全然いないのも変つている。全部運転手が、切符の受取りや、ドアの開閉なんか一人で行っている。それから、道がよいので、スピードも相当に出している様である。大体五十マイルから六十マイル、フリー・ウェイではそれ以上の速度を出して走っているようである。

汽車の旅——残念乍ら汽車にはニューヨークで四十分ばかり乗っただけである。

こちらは鉄道も日本の様に国有ではなく、全部会社である。ニューヨーク・セントラル・ステーションに行つて驚いたことは、先ずその宏大なこと、地下四、五階もある駅の構造と、その地下から発車している汽車である。

まず切符を求めて、地下のプラットホームに待っている汽車に乗る。また、日本の様に改札などの面倒な箇所は全然なく、そのまま乗車出来る。

汽車が出てからしばらくして車掌が切符を受取りにくるのだが、受取ればそれでオライである。

注目を引いたのはシートの位置は、全部進行方向へ向いて二人掛けになって並んでいるが必要に応じて簡単に四人掛けの向い合せに改められるようになっていゝことである。

到着駅でも、全然切符を駅員に渡す様な手間は入らず、降りたらさつさと出て行けばよい様になっていゝ。まことに簡便である。

アメリカにおける日本人

アメリカに在留している日本人という日本人、団体、指導者の多くは恐らくその表現に異論を唱えるであらう。日本人ではなく日系人 (The Japanese American) といわないと彼らは承服しない。戦前の在留邦人はアメリカに出稼ぎ、一旗あげて、錦を故国日本にあげることをその理想としていた。それが、アメリカの人々の感情を刺激し、日本人排斥法まで作らせる大きな原因ともなったのだ。戦後は漸くアメリカ人社会に融合してゆくことが、ほんとうの歩む道であることに考え方が大きく転回し、一世の間では戦後改正された法律に基づいてアメリカ市民権をとる人々が続出していゝのである。日本人の海外移民はブラジルについてアメリカが多い。既に三世、四世さえ生れつつある。日本は第二次世界大戦でアメリカに敗れたけれどもアメリカ人の日本人に対する考え方が大いに變

わつていゝことはたしかに事実だ。これは戦時中に在留邦人が在留ドイツ、イタリイ人に比べ、比較的従順で謙虚であつたことや、第四二部隊という日本人二世志願兵によつて編成された軍隊がイタリイ戦線で輝かしい戦績をあげたことが大きな感動をアメリカ人に与えたようだ。しかも戦後約百万のアメリカ人が日本に進駐したり、進駐関係の仕事をして、親日家が多くなつたことなどがあげられよう。われわれもアメリカ人から日本に行つたことがあると多くの人々から告げられた。

在留日本人の九割が戦前は農業関係に従事してゐた。しかし抑留生活で資財を失ひ、戦後は全く農業規模が変わつたためにそれだけの資力をもつ人は少く、戦後は庭園業、商業、サービス業等に転向するものが多いようである。また抑留関係で東部沿岸にいた日系人が漸次太平洋沿岸の方に變つてゆくような傾向があるようだ。

最近のアメリカに於ける日本ブームはたしかに顕著なようである。従つて日系人の芸術家の台頭が目ざましい。絵画の八島太郎、不老園劇堂、彫刻の野口勇等は著名である。日本画、日本茶道、華道の流行も目ざましい。シスコで某日本婦人は華道講習で連日大忙れでおかげでゆつくり家庭生活も楽しめならしい。日本料理店はニューヨークでも大きなものが数軒あり、ロスアンゼルス、シスコ、シカゴ等各地で大当りをとつていゝ。

日本の刺繍品、民芸品も愛され、日本建築が最近の住宅建築にどしどし取り入れられていゝ。ただアメリカ人は前にスエーデン趣味、メキシコ趣味をはやらせたが、間もなくすたつてしまつたこともあ

り、この日本ブームがどのような方向に進むかは注目されている。

戦後の日本進駐によって多数の戦争花嫁がアメリカに渡っている。二万人ともいわれているが、その実数はなかなかむづかしく、各地の日系人団体が極力調べている。一般的にいつて日本の大都会からきた女性には割にアメリカ的な生活に馴れるのが早いようである。ただ日本女性によくある控え目な消極的なことについて断学的なハンディーキヤップが解消されず、気苦労は随分あるようだ。とくに宗教的関心のないことからクリスチャン家庭との融合がうまく行かない例はよくあるらしい。彼女たちのアメリカの物質文化に対する尊敬と羨望が案外彼女らを精神的にそう深刻な悩みまで追いやらない面もあるという。

代表団名簿

鈴木昭夫	愛知県西尾市細池町	県青年部長
山口良明	大15・1・16 北海道空知郡樺南村三重	日青協理事
及川和彦	岩手県水沢市黒石町字鶴城一二〇	県青年部長
山口茂吉	山形県東置賜郡宮内町大字大郎	県青年部長
高橋トシ	大14・8・5 東京都港区麻布富士見町一九	前県青年部長
井戸沼俊顕	大14・3・10 福島県西白河郡矢吹町大字松倉字上松二三	前県青年部長
井戸沼良子	大4・8・15	女
男庭一成	大4・8・15 茨城県行方郡北蒲村大字小貫三三	県青年団副団長
加藤安	大10・3・2 水戸市元吉田町三三八	女
加藤公江	大12・4・4 茨城県水戸市元吉田町三三八	女
杉山金市郎	大4・3・13 栃木県下都賀郡都賀村大字家中二一四八	県青年団副団長
松本つや子	大5・7・1 那須郡黒羽町大字余瀬六五	県青年団副団長
上野義忠	大2・3・19 東京都中野区新井町五六六	友和 検査会執行委員長
山本義則	大14・11・2 東京都港区麻布本村町四八	
相馬豊胤	大11・10・17 東京都港区麻布富士見町一九	
相馬登喜子	大14・2・12	
相馬恵胤	東京都中野区広町二〇	九里商業社長
三井高維	東京都港区赤坂台町二	三井物産会理事
三井英子		
三井澄子	目黒区大岡山六二	

白根精一	東京都港区赤坂台町二	
白根直子		
木村利根子	東京都港区麻布富士見町一九	
木村操子	東京都中野区西町二 警察大学内	
中島秀夫	大15・6・10 東京都港区麻布富士見町一九	
伊勢田富二	大6・10・27 東京都練馬区豊立北四丁目三	
樺山有多子	大6・11・12 東京都新宿区柏木三丁目三九九	
浜田絢子	大11・10・24 東京都新宿区三光町二二	日本女子大学生
北村智津子	大8・10・21 東京都中野区江古田一ノ七三	
橋英夫	東京都港区三田一	
三土裕久	東京都世田谷区玉川奥沢町一ノ三英	
宮川勝三	神奈川県鎌倉市鎌倉山荘	
宮川信子		
樺山紀次	神奈川県大磯東小磯五三四	
樺山松子		
樺山竹子		
関辰二	東京都港区麻布富士見町一九	
太田ヤチ	(ニューヨーク在住)	女
住友左衛門	横浜市戸塚区東俣野	
住友孝	神戸市東灘区住吉町古寺四七八	
若宮牛又	栃木県小山市横倉	前日青協副会長
若宮治		
増川善明	大4・1・1 富山県高岡市太田四九二六一二	県青年団副団長

須河 裕 大11・1・28 富山県東礪波郡井波町井波坂六三

作田 勝 昭2・4・14 石川県金沢市木町巻港丁八〇

太田 智勇 大14・1・12 山梨県南都留郡道志村五九六四

下条 晋作 昭2・4・21 岐阜県関市千三三四〇

鈴木 登美 昭7・5・24 東京都港区麻布富士見町一九

山根 和衛 大14・3・12 大阪府豊中市朝町北三丁目三八

増田 敬作 昭6・7・20 東京都港区麻布富士見町一九

安井 淳三 大15・1・28 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢元一志

横山 忠雄 大10・9・13 兵庫県姫路市西二番町一六

前川 直弥 昭5・10・16 東京都港区麻布富士見町一九

網干 寿宏 昭6・9・20 奈良県高市郡明日香村大字高丘二二五

藤本 勇 昭3・8・13 奈良県桜井市阿部三三三

山田 綾子 昭11・12・9 東京都港区麻布富士見町一九

神東 正幸 昭5・7・4 徳島県鳴門市撫巻町木津三九五

遠藤 将弘 昭6・1・20 徳島県鳴門市北灘町折野字屋敷二六六

朽木 新平 昭8・3・11 香川県小豆郡池田町大字池田三三三

石井 邦一 昭4・2・23 福岡県嘉穂郡庄内町有井二二九

福島 若生 大13・6・27 佐賀県西松浦郡西有田村曲川之一二五一

吉原 羊一郎 昭6・1・16 佐賀県伊万里市大塚甲二九〇三

松尾 弘泰 大13・1・22 長崎県諫早市福田町二九五六 鎮西社宅

成田 三吉郎 大14・2・27 大分県大野郡三重町大字市巻六八

丸山 祐三 昭6・2・14 宮崎県西諸県郡高原町大字藤本田七四八

砂坂 実 昭7・2・28 鹿児島県鹿毛郡南種子町西之三三七

真東 親 熊本県玉名郡長州町長州一四一六 県青年団副団長

尚 隆 沖縄那覇市サイラン橋通り桃原公園

尚 ひろ子 (マキノ在住)

波沢 雅英 (マキノ在住)

波沢 房子 (マキノ在住)

浜井 信三 広島市旭町

浜井 文子 元広島市長

編輯後記

一九五八年世界大会に参加した青年団体の指導者の多くは自己の内蔵する考え方に大きな波紋を起した。自己の精神革命はどれほど顕微的な人物をもその必要性を認めざるを得なかつたようだ。代表団のガイダンスによつて報告書を作成することになった。わたしたちは羽田につくや直ちにMRAハウスに飛び込んだ。速い故郷から迎えにでた妻や幼い子どもを宿舎においたままにして……。翌朝宿舎に飛んで行つた。いささかの編集経験しかないわたしたちに強いていえるのは報告書を出すというガイダンスは絶対的なものであるという最上命題がわたしたちを動かしているのであろうということだ。

(横山)

思いがけずMRA大会参加報告書の編集を引受ける破目になつて、それこそなげなしの文才？ にむち打つてその任を果したものの期待にそむいたものになつたのではないかと、それだけが心配である。

幸いに、横山氏の様な既に著作もあるベテランと一緒に仕事に当たられたことが私の励みにもなつた。

わたしたちがMRA大会に参加してうけた経験は、こんなレポートの中に簡単に集約出来るような生易しいものではない。人間が生まれ変わると言うけれど、わたしたちは本当に自分を改造する方法を学んだのである。

この重要な経験が、言葉足らず乍らもみんなの報告の中に生かされ

ていることを信じている。

いささかでもこのレポートが始めてMRAを知る人の手がかりにもなれば幸いである。

(石井)

MRA世界大会についての概並びにアメリカ旅行記、アメリカ見たまま聞いたままは、成田三吉郎氏他吉原羊一郎、丸山祐三、砂坂実、及川和彦氏らによつて書かれたものだが、編輯の都合上、合作の形で掲載し特に、筆者名を記入しなかつたことを御諒承下さい。

(中島)